

No.12
2002.03.28

いしかわの遺跡

学習講座 須恵器づくり

平成13年11月11日に開催した学習講座「須恵器づくり」で製作した「須恵器」を、12月2～4日にかけて古代体験ひろばにある復元古窯で薪を使って焼き、9日に窯出しを行いました。

攻め焼き中の窯内部

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp

ホームページ <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

学習講座「須恵器づくり」



講座の様子

須恵器は灰色で硬く焼き締まった土器で、古墳時代の中頃（5世紀前半）に朝鮮半島から伝わった焼成技術をもちいて焼いた焼き物のことです。縄文土器や弥生土器とは違い、窯を使って焼き上げます。野焼きでも1,000度近くまで温度が上がりますが、熱が逃げてしまうのでその温度を保っておくことができません。窯を使うことによって高温状態を維持することができるようになり、須恵器が誕生したのです。

須恵器はまたたくまに全国に広がり、各地で焼かれるようになりました。当時の人たちにとって大事な焼き物であったことでしょう。その

須恵器の伝統は、その後の時代にも受け継がれました。石川県珠洲市で焼かれた珠洲焼が、その代表例です。

講座は、平成13年11月11日(日)、24名の参加者を対象に行いました。まったくの初心者の方や、かなりの熟練者の方もいらっしゃいました。製作した須恵器は、古代にもっとも大量に作られた「杯」と、少々難しいと思いましたが「瓶」を課題としました。

最初はなかなかうまくいかない方もおられました。最後にはなんとかみなさん作品ができました。



参加者の作品



窯詰の様子

できあがった作品は、3週間体験工房で乾燥させ、それから復元古窯に入れる作業（窯詰）を行いました。初めてのことで、どのようにすればいいのか手探りの状態でした。

1点ずつ置いた場所をチェックしながら慎重に、壊さないように作業を進めました。重ねて焼くものには、焼いた後にくっつかないように古代にも行われていた、藁を間に挟むという方法をとりました。

窯詰が終わって、いよいよ窯焚きが始まりました。窯焚きもまったくの初めてです。果たしうまくいくのか不安でいっぱいでした。



窯焚き開始です。始めは外から窯の中を暖めます。



炎は引かれて窯の中へ



攻め焚きの様子です。排煙口からも炎が上がります。この後、窯をふさいで冷ました。



窯の中の様子



窯出し日の様子です。1点ずつ確認しながら出しました。



窯を開けたときの様子です。大量のオキが残っていました。

窯焚きは、12月2日(日)～4日(火)の2泊3日で焚き、そのあと冷まして9日(日)に窯出しを行いました。参加者のみなさんも興味津々です。

しかし、出てきたのは銀色に光った焼き物でした。薄い銀色の膜が貼りついていたので。簡単にはがれるものもありましたが、焼き物の素地の中に入れてとれないものもありました。これは、冷ますときに湿気が多くて燻し焼きの状態になってしまったためにできたものだそうです。作品の断面を見ると灰色になっていたので、一応焼き方に間違いはなかったようです。来年こそはもっと古代の須恵器に近いものを作ろうと決意を新たにしました。



断面は灰色に！一応須恵器！

発掘調査 畝田ナベタ遺跡

この遺跡は金沢市北部の平野部、金沢港から南へ約1kmの地点に立地しています。金沢西部第二土地区画整理事業にともなって調査が行われており、本年度は3年目となります。

遺跡が最も繁栄した9世紀後半（平安時代前期）には、大型の建物群が整然と配置され、遺跡の西側を南北に流れる河川を交通に利用していた様子がうかがえます。大きな井戸も多く作られていました。

今回の調査では、建物に付属する溝から、金箔や漆で装飾された珍しい帯金具が見つかりました。帯金具は、古代の貴族や役人が革ベルトにつけた装飾品です。身分によって大きさや素材が決められていました。今まで発掘された帯金具は文様がないものがほとんどです。

この帯金具は表面に花や唐草の文様がほどこされ、地金の上に漆を接着剤として金箔を貼り、さらに文様の窪みに黒漆をのせて、文様を浮き立たせた精巧なつくりのものです。成分分析の結果、古代の日本の銅製品には含まれない錫が多く含まれており、外国製である可能性が考えられます。とても身分の高い人が身につけていた可能性が考えられます。



帯金具（原寸の2倍）
縦18mm、横19mm、厚さ2mm、重さ2.3g



帯金具が出土した溝と建物跡



板が縦に打ち込まれた井戸



整然と並ぶ大型建物跡群

発掘調査

だいじょうじ畑遺跡

珠洲市飯田町の市街地から北西方向に約5km離れた、若山川とその支流とに挟まれた河岸段丘上に立地しています。飯田町から大谷峠を通り大谷町へと抜ける一般国道249号線の改良工事に伴い、発掘調査を行ないました。

調査地南東側に隣接した、浄土真宗大谷派般若山正福寺の境内から北西側にある畑地と墓地は、通称「だいしょうじばたけ」と言われています。珠洲焼片や五輪塔、宝篋印塔ほうきょういんとうの残欠が点在し、一寸七分の金銅製薬師如来坐像の懸仏が明和年間に出土していることなどから、かつてこの地に天台宗もしくは真言宗寺院である「だいしょう寺」があったと伝えられています。

発掘調査では、石垣で区画された墓をはじめ、丘陵南斜面を造成してつくられた中世後半から近世にかけての墓跡を多数確認することができました。墓坑と思われる方形や円形の土坑、その周りの小穴など約90カ所から、埋葬された人骨を検出しています。墓坑の上部には、拳大から人頭大の自然石をいくつか集めた集石や、円形に配石をしたものが約30基あり、墓坑周辺や内部からは、五輪塔や五輪塔線刻板碑などの石造物がみつかっています。また、中世後半のものと思われる珠洲焼壺に、すり鉢を蓋として被せた蔵骨器も1組出土しています。副葬品は3基の墓坑底から北宋銭が合計15枚と、火葬骨を埋納した小穴からガラス製の数珠玉1組などが出土しています。これらの成果から、今回発掘調査した場所も「だいしょう寺」の1部に含まれると考えています。



斜面に造られた中世の墓地跡を掘ったところ



墓坑の中を掘り下げているところ



珠洲焼の蔵骨器



五輪塔が出土した様子

平成13年度 発掘速報会

発掘速報会は、一般の方々を対象として、県内各地で行われた発掘調査の成果をスライドなどをまじえて紹介し、埋蔵文化財に興味をもっといただくことを目的として開催しています。今年度は、石川県立社会教育センターにて3月10日(日)に行いました。

当日は雨模様のあいにくの天気となりましたが、たくさんの方々にお集まりいただきました。

昨今、みなさんもお存知のように、考古学のこれまでの常識を変えるような発見が相次ぎ、ほぼ毎日のように新聞紙面などをにぎわせています。なかでも今回報告された7遺跡はその際たるものです。

発掘報告は、金沢市埋蔵文化財センターの前田雪恵さんによる「金沢市中屋サワ遺跡」から始まりました。中屋サワ遺跡は、縄文～鎌倉時代にかけての遺跡ですが、特に縄文時代の水場遺構や漆器、弥生時代の大型石庖丁は注目されています。

七尾市教育委員会の北林雅康さんは「七尾市万行遺跡」の報告をされました。古墳時代の大型掘立柱建物群と海上交通とをからめて、当時の日本海域における物資収納施設であった可能性を示唆されていました。

津幡町教育委員会の戸谷邦隆さんの「津幡町北中条遺跡」の報告では、弥生時代後半～古墳時代初頭の竪穴建物跡や、棺を入れるための空間を木で組んだ木槨墓などが見つかったこと、木槨墓は北陸地方では珍しいものであるとの説明がありました。

当センター宮川勝次さんの「羽咋市東的場タケノハナ遺跡」の報告では、建物跡などの居住域を溝で囲っていることから、環濠集落の可能性があると示唆されました。

寺井町教育委員会の井上誠一さんからは「寺井町史跡秋常山古墳群」の報告として、県下最大の前方後円墳である秋常1号墳の隣に位置する方墳の調査状況に関して、埴輪を伴う方墳としては県内唯一の例であるとの報告がありました。

当センターの和田龍介さんから「金沢市畝田・寺中遺跡、畝田ナベタ遺跡」の報告として、弥生時代～近世のものが見つっていますが、そのうち古代にしぼって説明がありました。2遺跡からは多数の掘立柱建物跡、墨書土器、帯金具、郡符木簡などの一般集落遺跡からは出土しないものが見ついていることから、役所的施設の存在を示唆していました。

当センターの大西顕さんからは「志賀町館開野開遺跡」の報告として、鎌倉～室町時代の掘立柱建物跡や井戸跡が見つかっており、それらは断面がV字をした堀によって区画されていること、また鉄製品を作るときに出てくる鉄の滓が多く見ついていることから、鍛冶職人が居住していた可能性を示唆していました。

3時間にわたる速報会でしたが、みなさん熱心に最後まで聴いておられました。今回報告のあった7遺跡は、今後の調査・研究によってさらに遺跡の性格が明らかにされていくことでしょう。



速報会の様子

出土品整理 その3 実測・トレース

遺跡から出土した遺物は、その遺跡の時期や性格を明らかにする手がかりになりますが、出土した遺物すべてを実測・トレースするわけではありません。そのなかから選ばれたものが図化されるのです。

実測には、鉛筆、三角定規、ものさし、デバイダー、マーコなどを使います。実測とは、立体物を平面図にする作業です。一見簡単な作業に見えますが、遺跡から出土する遺物は破片であることが多いため、実測には本来の形はどんなものであったのかという知識も必要になってきます。



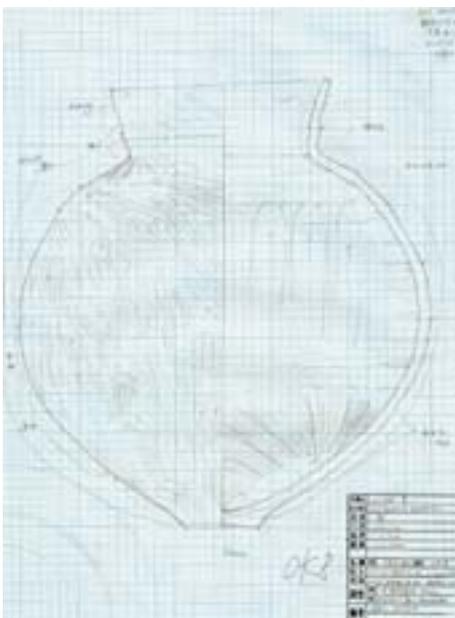
土器の厚みを測っています。テレビに映してそのラインをなぞって図化もしています。

実測が終わったら、今度はトレースです。正確に実測図で書いた線をなぞっていきます。

遺物を図面にする作業は、考古学では最も基礎的なことのひとつです。実際に遺物を見なくても、図面を見ればその遺跡がどんな遺跡なのかを考えることができるようになるのです。



トレース。緊張します。



実測図



トレース図

左ができあがった実測図です。土器の形や文様だけではありません。土器に残されたさまざまな痕跡を書き込みます。

右はトレース図です。このトレース図が、発掘調査報告書に使われることになります。

訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

みょうせんじせきとうぐんざいち

明泉寺石塔群在地 (県指定史跡)

明泉寺石塔群在地は、鳳至郡穴水町字明千寺にあります。県指定史跡になったのは昭和58(1983)年のことです。指定を受けたのは、明泉寺境内の4,023㎡と、同寺から約300m離れた所にある、通称「鎌倉屋敷」と呼ばれる墓地195㎡の2ヶ所です。



板碑と彼岸花

明泉寺は、白雉三(652)年の開創と伝えられる真言宗の古刹です。その境内には、国指定重要文化財の、高さ約6.8mの石造五重塔があります。この塔は、明泉寺に残る室町時代末期の境内古絵図に見える東塔にあたると言われています。

三重から上が倒壊して二重屋根部分しか残っていませんでしたが、昭和45(1970)年に解体修復工事が行われ、現在のような立派な塔に復元されました。

境内には鎌倉時代から江戸時代にかけての五輪塔・宝篋印塔・板碑などが多数見られます。

鎌倉屋敷には、源頼朝の墓と伝えられる宝篋印塔を始めとしてたくさんの塔が立ち並んでいます。また、「永享三(1431)年八月二七日」と記された五輪塔の下からは、珠洲焼の壺が出土していますが、珠洲焼の年代を決める基準資料となっています。

石造五重塔を始めとしてたくさんの石塔群が林立している様子は、まるで中世の世界にまよいこんでしまったかのようです。



石塔が並んでいる様子

交通：のと鉄道古君駅下車徒歩15分、
能登有料道路終点此木(くのぎ)IC交差点右折 249号線珠洲方面
比良ガード過ぎ右折 穴水農面道路
住所：鳳至郡穴水町字明千寺ル18 - 1
お問い合わせ：穴水町教育委員会社会教課 電話 0768-52-3710